

# 求聞持法

浄土真宗にはない修行法ではありませんが、私

が、この能力は欲しいと感ずる能力ではありませんのでご紹介させていただきます。

求聞持法とは聞持を求める法で、聞き見て知ったことを持ち続ける方です。知ったことを忘れないということです。本当にほしい能力です。平安時代の官吏採用試験を受ける学生たちには記憶力増進法として知られていたようです。空海さんも若い時に行っていた行というこ

とで、真言宗などで現在でも残っている修行法です。修行法は虚空蔵菩薩を本尊として、その前で虚空蔵菩薩の真言を唱えるというものです。虚空蔵菩薩である理由は、虚空がすべてを蔵するというこで、あらゆる智慧や慈悲を蓄えるということとで本尊とされています。真言を唱えるといつてもその量は生半可ではありません。一日一万遍を百日行います。その間の生活も大変質素という言葉では言い表すことはできません。命を落とす者もいたほどです。



簡単に私の力で得るものはないのです。日々の地道な積み重ねなのです。

この「一」で「止まれ」と書いて「正」になる。伊私

## こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

# 旧訳新訳

仏教を学ぶ上でややこしいのが、同じ物事を表すのに違う

言葉であることがたくさんあるということです。浄土真宗のご本尊阿弥陀如来にしても、阿弥陀如来、無量寿如来、不可思議光如来と様々です。これは、古インド語のアミターを音写した阿弥陀と意味を訳した無量寿・不可思議光があるからです。

日本の仏教は、インドから中国に渡り、中国で漢字に変換されたものが伝わっています。漢字に変換するのにも色々あって、音をそのまま漢字にあてはめたもの。意味で翻訳したものがああります。たとえば南無は、元の原語のナマスを当てはめたもの。これを意味で翻訳すると帰命となります。

音や意味の違いがあるにも関わらず、さらに翻訳の時代によっても変わります。極楽と安楽、衆生と有情。区分としては西遊記の三蔵法師のモデルとなった玄奘から新訳とよび、鳩摩羅什から新訳までを旧訳とよび、それ以前を古訳といいま

南無 → ナマス ← 帰命  
す。それにより同じ仏や人物でも言い方が変わるので。学ぶのは難しいですが、また面白いのです。

